

第 45 回 設楽ダム魚類検討会 議事概要

日時：令和 8 年 1 月 29 日（木）15:00～17:00

1. 検討経緯等

(1) 事務局からの報告

- 文化庁事前協議を経て見直したネコギギ保全のロードマップにおいて、移植実験、移植計画の作成、環境改善の実施に関する進捗状況及び計画について報告した。

2. 生息状況調査（R7）

(1) 事務局からの報告

- R7 年の定期モニタリング淵における生息状況調査の結果、豊川流域の推定個体数は、R6 年と同程度であったこと。また、長期的には減少傾向であったが、近年（R5 年-R7 年）は横ばい傾向であったことを報告した。
- R5 年 6 月の出水以降、推定個体数が回復し、それ以降は安定的に当歳魚が出現する淵がみられたことを報告した。

(2) 主な意見

- 推定個体数の回復に伴い、移植候補淵のキャパシティについても検討する必要がある。

3. 移植実験（R7）

(1) 事務局からの報告

- R7 年には飼育施設での繁殖により、計 5,100 個体を得られ、累計繁殖個体数は R7 秋までで 28,651 個体となったことを報告した。
- R7 年秋の放流結果と、R8 年春の放流予定を報告した。
- R5 年より野外生まれ（放流由来）の個体数の比率が高まっている箇所がある一方、放流個体に依存した個体群となっている箇所もあることを報告した。
- 放流個体の一部は、他淵へ移動していることを報告した。

4. 定着・繁殖に関する要因分析

(1) 事務局からの報告

- 今後の環境改善やネコギギの放流箇所の選定に活用するために物理環境の要因分析を行った。解析結果からのネコギギの生息に適した淵環境および今後の環境改善施工の方針を報告した。

(2) 主な意見

- 要因分析の解析の方針は概ね問題ないが、出水の効果を季節別でも整理する必要がある。また、淵の物理環境以外の項目等、過年度までの検討結果を踏まえて整理する必要がある。

5. 環境改善手法の検討について

(1) 事務局からの報告

- 環境改善手法の成功事例としては、現在深みの創出工を行った3淵で効果があったと評価していることを報告した。
- ネコギギの生息には大規模な淵が適しているため「深みの創出工」を、また繁殖は浅い箇所の間隙を使用しているため、浅い箇所への「巨石組み」を今後の環境改善施工の主軸として実施することとした。

(2) 主な意見

- 繁殖場以外に安定的な生息に必要と考えられる「出水時の避難場所」や「昼間の隠れ場」等、過年度までの検討結果も踏まえて整理する必要がある。

6. 存続性の検討

(1) 事務局からの報告

- 存続可能性分析モデルに生息状況を用いて存続性を評価し、感度分析から目標とする生残率・繁殖率、確保すべき親魚数・当歳数の考え方を報告した。
- 野外生まれ（放流由来）の2歳以上の割合が増えており、存続可能な個体群に近づいていることを報告した。
- 感度分析の結果、生残率・繁殖率を高い水準とすることで、存続可能な集団となることを報告した。

(2) 主な意見

- 存続可能性分析モデルの結果は、確定的なものではなくプロセスであるとの言葉もある。そのため、説得力と保全の実行性を高める検討を進める必要がある。また事業スケジュールを意識して検討を進める必要がある。

7. 移植計画

(1) 事務局からの報告

- 移植先で存続可能な個体群とするために、区間内に複数の安定した移植淵を創出する。生息・繁殖に適した淵を移植淵として選定するとともに、加えて環境改善で適した淵を創出し、安定して当歳魚が産出される淵数を確保する移植計画について報告した。
- 移植計画では、試験湛水前の複数年で直接的な改変を受ける集団の採捕を行う。採捕した個体のうち、繁殖適齢期の個体の一部を系統保全に供し放流個体を産出する。その他の個体は移植先へ放流する計画を報告した。

(2) 主な意見

- 移植先の環境改善については、改善するだけで終わらず、改善効果についても分析する必要がある。また、章間の検討内容の繋がりを意識した移植計画を作成する必要がある。

8. モニタリング計画

(1) 事務局からの報告

- 設楽ダムにおけるフォローアップ制度移行に向けた流れを報告した。
- ネコギギの環境保全措置では、PDCA サイクルを考慮した順応的管理を行い、存続性のある個体群の創出を目指す。その判断に必要な情報をモニタリングにより取得する方針のモニタリング計画とした。

(2) 主な意見

- フォローアップも含めたモニタリング計画については、事業内容を考慮した調査項目を検討する必要がある。また豊川本川における環境変化も調査する必要がある。

9. 系統保全について

(1) 事務局からの報告

- 系統保存については、分散飼育を行い、また近交化を可能な限り防ぐため野外個体との入れ替えを主とした方針を設定し、系統保全の基本方針案を報告した。

(2) 主な意見

- 系統保全については、遺伝的なモニタリング調査の必要性も検討する必要がある。

10. 地域保全について

(1) 事務局からの報告

- 地元高校や小学校などで実施した R7 年活動状況を報告した。
- 今後の地域保全に向けたロードマップ（案）を作成し、今後の予定を報告した。

11. その他

(1) 事務局からの報告

- ネコギギの当歳魚が確認された淵と確認されなかった淵では、その他魚類の確認種数に有意な差はなかった。ネコギギの当歳魚が確認された淵のみで、ニシシマドジョウとアマゴの2種が確認されたことを報告した。
- カジカ本移植に向けて、R7 年は移植実験を行ったこと報告した。

(2) 主な意見

- 魚類の群集構造については、区間別の比較や量的な比較等が行うことができると良い。

以 上